

特集

すべての生徒が参加できる英語授業へ

巻頭エッセイ

表紙裏 遊びつづけて、世界丸ごと uwabami

特集

すべての生徒が参加できる英語授業へ

- 01 生徒の学びと学習環境 —— 学期のはじめに立ち止まって考えてみたいこと 竹内 理
- 04 生徒の学びを育てる授業づくり 田尻 利恵子
- 06 読み書きに困難がある生徒への対応 村田 美和
- 07 カラーユニバーサルデザイン(CUD)に配慮した教材づくりの工夫 溝上 陽子

連載

- 08 実践 NEW CROWN ーわたしの授業紹介ー 清家 大地
- 10 英語教師のための基礎講座 生徒のニーズを活かす英語授業②ー英語で表現しなかったことを収集したEasyConcの活用 日臺 滋之
- 11 Essay Washback from Four-skills Tests in Japan David Allen
- 11 リクツで納得! 学校英文法の「文法」名詞句の中の出来事 亘理 陽一
- 12 明日の授業と評価をブラッシュアップするQ&A 今井 裕之
- 13 TEN通信 デジタル教科書アップデートのお知らせ/学習者用デジタル教材のご案内

遊びつづけて、世界丸ごと

uwabami

遊んでいたら、仕事になった。子どもが生まれたら、世界がひろがった。
ずっと遊びつづけるというのが、uwabamiだと思っています。



制作も育児も楽しみたい夫婦で活動しているアートユニット。アニメーション・絵本・イラストレーション・キャラストレーションと多岐にわたる。テレビ東京シナジューの「みんなのダンス」の企画制作、著作に絵本『木下ゆーきのわくわく』シリーズや子育てエッセイ『私は赤さん』（Gakken）などがある。

夜 9時、吉祥寺のアーケードのシャッターが下りたあと、週3回ほどライブペイントを行っていました。uwabamiの活動の原点は、約15年前に始めた、この「キャラストレーション」です。似顔絵のようで、単なる似顔絵ではありません。お客さんが電車好きとわかれば、電車に乗っている風に描いてみたり、車掌さん風にしてみたり。目の前のお客さんのリクエストを聞きながら、やり取りの中で一緒に“物語”を作っていく、そんな表現活動です。

この活動からご縁がつながり、地元の商業施設とのコラボレーションが始まりました。当時は大きな紙に直接描き込むというアナログな方法で、商業施設で働く100人を超えるクルーの似顔絵を描いたこともありました。

今では絵本やエッセイをあわせて10冊ほど出版し、子ども向けテレビ番組「シナジュー」の「みんなのダンス」のアニメーション制作を担当するなど、キャラストレーションにとどまらない様々な活動をしています。

活 動の大きな転機になったのは、子どもたちの誕生です。子どもが生まれてから子ども向けの仕事が増えました。観察の日々を重ねることで、想像では描けなかった“本当にかわいい”表情や仕草が描けるようになりました。今挑戦しているのは、あえて表情を固定して、動きや仕草で感情を表現するという試みです。表情をシンプルにすればするほど、動きが際

立ってきます。動きに注目してもらうことが重要なダンスのアニメーションでは、特に効果的だと感じています。

ず っと大切にしているのは、「遊び」です。SNSに投稿する作品は全部遊びの延長ですが、それを見て仕事の依頼がくることもあります。遊びを増やすことで遊びの仕事が増えていくので、仕事もどんどん楽しくなっていきます。最近では常時10件ほどのプロジェクトが並行して進んでいて、育児との両立で精いっぱいなのときもありますが、**やらなくちゃいけないことを全部置いておいても、「遊びの時間」は死守しています。**赤ちゃんの視点から世界を描くアプローチを評価していただき書籍化された子育てエッセイ『私は赤さん』も、遊びの中から生まれたもののひとつです。「赤ちゃんはしゃべらないけれど、何を考えているんだろう？ 何とかコミュニケーションを取る方法はないかな？」と思い、赤ちゃんの気持ちになって家族でアフレコをして遊んでいました。それをSNSに投稿したところ、多くの子育て世代の方から応援していただけるシリーズとなりました。

大 学を卒業して、新卒でフリーランスという生き方を選んだので、世の中のことはあまり知りません。でも、**外に出て人とつながることで、世界がひろがった**と感じています。かつて

は、細部まで自分の目が行き届かなくなってしまうことが不安で、「誰かと一緒にやる」ことへの抵抗があった時期もありました。作品を買っていただけることを素直に喜ばず、相手に負担をかけているように感じていたこともあります。しかし、仕事の渦が大きくなっていくなかで、安全性や耐久性などの壁を超えるためには第三者との協働が不可欠であることや、大きな挑戦ほど仲間が必要なことを実感し、今では誰かと一緒にものづくりができることの豊かさや応援してもらえることの幸せを感じています。

将 来的な夢は、遊園地をつくることです。空間全体を使って、アニメーションや絵本だけでは表現できない、“世界丸ごと”を作りたいと思っています。小さい頃は趣味のひとつに過ぎなかった絵。先生や家族に褒めてもらえることが嬉しくて、続けていたら仕事になりました。本気でバンド活動に取り組み、音楽で生きていくことを目指していた経験が、今ではアニメーションの楽曲制作に生かされています。**一人でやろうとすると大変でも、みんなと一緒に取り組むことで、渦がどんどん大きくなると感じています。**

吉祥寺の夜のアーケードから始まった遊びが、誰かとつながり、作品になり、やがて空間へ。いつか“空間丸ごと”をつくれる日を目指して、遊びつづけていきたいと思っています。



商業施設でのライブペイントの様子



おじいちゃんが友だちと組んでいるバンドに孫たちも参加した様子



音楽や効果音も含めてすべて制作することも。自分の子どもたちの声も活用！

すべての生徒が参加できる 英語授業へ

いよいよ令和8年度が始まりました。

生徒の学び方や学習環境が多様化する今、新学期を走り出してからではゆっくり考えにくいことを、学期のはじめに立ち止まって整理しておきたいとお考えの先生も多いのではないのでしょうか。

本特集では、竹内 理先生に、新学期前におこなっておきたい自律的学習者育成のための環境・授業・支援の総点検の方法についてご解説いただきます。

また、ことばの力で生徒の学びを育てる授業づくりの実践例を田尻 利恵子先生にご紹介いただきます。

さらに、具体的に実践できる合理的配慮として、村田 美和先生には読み書きに困難がある生徒への対応を、溝上 陽子先生にはカラーユニバーサルデザインに配慮した教材づくりの工夫をご紹介いただきます。



- 01 生徒の学びと学習環境 — 学期のはじめに立ち止まって考えてみたいこと 竹内 理
- 04 生徒の学びを育てる授業づくり 田尻 利恵子
- 06 読み書きに困難がある生徒への対応 村田 美和
- 07 カラーユニバーサルデザイン(CUD)に配慮した教材づくりの工夫 溝上 陽子

生徒の学びと学習環境—— 学期のはじめに立ち止まって考えてみたいこと

竹内 理 (関西大学)



はじめに

生徒の学びのあり方と、それを取り囲む学習環境は、加速度的に多様化の一途をたどっているように思えます。このような状況のなか、新学年・新学期がはじまる4月になって、「あれをもっと考えておけばよかつ

た」、「これをもっと準備しておけばよかつた」、「それはすっかり忘れていた」という後悔(?)の気持ちに苛まれることが、今まで以上に多くなってきたのではないのでしょうか。そこで本稿では、紙幅の許す限り、

授業が走りだしてからではゆっくりと時間をとって考えることがむずかしいような、さまざまな事項を、大きな方針から具体的な問題までとり混ぜて、考えていきたいと思えます。



自律的な学習者の育成を考える

まずは「自律的な学習者を育てる」という大きな方針から。これは、いたるところ

で耳にする方針ですが、なかなか一筋縄ではいかないものです。原因はいくつかある

かもしれませんが、いきなり自律性を育てるところから話を始めてしまうから、

ではないでしょうか。自律性は、生徒が他者の学び方と自らの学び方を比較し、よいものを取り入れ、自分にあわせて調整しながら使えるようになっていく過程の延長線上にあります。1人で学習をさせれば自律性が育つというものではなく、他者（教師や仲間など）と学びながら育てていくものです。「個別最適化」が叫ばれる昨今、どうしても「個別」の方に目が行きがちですが、「他者との学び」（いわゆる「他者調整」）

を「自らの学び」（「自己調整」）へと変えていく過程を授業に組み込み、それをどう支援していくのかを、授業開始前の今だからこそ、しっかりと考えてみたいところです。

これと関連して、自律性の育成を考える時には、「自己決定」と「感情の調整」の要素も大切になります。どんな課題（たとえば宿題）を、どの程度の度合い（たとえば選択肢を与える、自ら題材を見つけさせる）で生徒たちの決定にゆだねていくのか、

という自己決定の範囲と、「楽しい」、「なるほど」、「もっと知りたい」というようなポジティブな感情を喚起・維持させる学習上の工夫についても、あわせて考えてみるとよいでしょう。「他者調整」から「自己調整」へと成長していく学びが、「自己決定」、「感情の調整」の工夫で支えられている時に、「主体性」(agency)を十全に発揮する「自律的な学習者」が育っていく、ということをお忘れしないようにしたいものです。



学習環境の整備を考える

●ICT・AI環境を考える

学習環境の話になると、どうしても教室内の機器・装備に意識が行きがちになります。たとえば、(邪魔にならない)短焦点のプロジェクタを整備し、効率的に教材を投影したいとか、マイク付きのイヤホンを用意し、学習アプリをより効果的に利用したいという具合です。もちろん、このような具体的な機器・装備について考えてみることも決して悪いことではありません。しかし、もう少し視点を変えて、学習環境をとらえてみるのはどうでしょうか。

たとえば、タブレットPCの利用が当たり前のようにになっている今、その学習履歴を活用しない手はありません。それでは、どのような形態で、どこに(たとえばクラウド上に)学習履歴を残し、どんなふうに分析すれば、効率的かつ長期的に活用していただけるのでしょうか。またその際に、どうすれ

ば個人情報適切に保護できるのでしょうか。こんな視点で学習環境を考えてみるには、授業が始まる前のこのタイミングこそが最適のように思われます。また、タブレットPCの家庭への持ち帰りポリシーを学習履歴と関連させて考えてみると、宿題の出し方や、授業でやるべきこと(とやらなくてよいことの区別)が明確になっていくはずですよ。

ほかにも、生成AIアプリや翻訳アプリの利用方針や利用範囲について考えたり、支援が必要な生徒に対する学習アプリの使い方について考えたりするのも、このタイミングがもっともふさわしいのではないのでしょうか。

●広義の学習環境を考える

学習環境というと、生徒を取り巻くものすべてを指す、とも考えることができます。そうすると、たとえば図書室へどのような

本や教材・資料を入れるのかも、学習環境の整備となるでしょう。また、生徒の多様性を考えながら、教室で使える参考書・辞書類をどう充実させていくのか、教室内の掲示物をどう変えていくのかなどを考えることも、学習環境の整備の中に含まれるでしょう。

さらにいうなら、生徒の学びを取り巻くものとして、英語科内の同僚性の構築や協働のあり方、市内・地域の英語科教員間での教材や教え方共有のあり方、そして校区内小学校との情報交換のあり方も、広義の学習環境に含まれてくるかもしれません。

上記事項は、いずれの見直しも、タイミングを逸してしまうと取り組みなくなった、後回しにされてしまったりするものです。この時期に少し立ち止まって、考えてみてはどうでしょうか。



授業のあり方考える

●ゴール(めあて)を考える

大きな方針や学習環境の話がすんだら、いよいよ授業そのものに目を向けてみましょう。この面では、単元毎のゴール(「めあて」)やそれと連動した授業毎のゴールを考えてみるのはどうでしょうか。1年分は難しくても、1学期分の見通しを、粗くて構わないので立ててみるだけで、かなり授業の構成が変わるはずですよ。

ゴールが決まれば、次にゴールに対応した評価のルーブリックを考えてみる。そして、

そのルーブリックを横目でみながら、ゴール達成のために、どのように言語材料を導入し、どれくらい練習量を確保し、どんな言語活動をすればよいのかを考えてみる。パフォーマンス課題や小テスト、定期テストのあり方についても、アイデアをざっと書き出しておく。生徒の多様な学びへの対応も、こうすればうまく組み込めるかも、あそこならうまく組み込めるかも、とあたりを付けておく。

このような一連の流れのシミュレーション

をやってみて、できれば同僚と共有してみるのも、新学年が始まる前のこのタイミングが打ってつけといえるでしょう。

●情意面を考える

ゴールを明確にし、それに合わせた評価方法を定めて、ゴールの達成を実現するように授業をおこなったとしても、生徒が「これなら自分でもやれるかも」と思わなければ、それは「絵に描いた餅(pie in the sky)」状態となってしまいます。

昨今、実際の学習行動にあたる「認知

的な側面」は、「メタ認知的な側面」(めあて+振り返り+修正)でのサポートと、「情意的な側面」(自信、不安、動機など)でのサポートがなくては、うまく動作しないということが多くの研究で示されています。特に、「これなら自分でもやれるかも」という「やれる感」(自己効力感)を高めることが、絵に描いた餅にしないための鍵となるのです。

では実際に、どうすれば「やれる感」を高まるのでしょうか。その処方箋は、生徒

に応じていくつか考えられるのですが、その1つとして、問題解決の仕方(学び方)をモデルとして示し、足場をかけながら何度か練習をさせ、うまくいかなかったところを振り返らせて、やがて成功体験へ導いていく方法があります。生徒のやる気を空回りさせないためにも、方法と足場の提示、そして振り返りの機会が大切ということを、頭のどこか片隅に入れながら、授業計画を考えていきたいものです。

また、他者の学びの成功事例を見せること(いわゆる「代理体験」)も、「やれる感」を高めるための処方箋の1つといわれています。代理体験を実現するためには、どのような他者の学び(たとえば、常にうまくできる生徒、いわゆる「出木杉君」の学び)の成功事例を見ればよいのでしょうか。ペアやグループをどう組み合わせればよいのでしょうか。色々な条件を検討する必要があります。



支援の進め方を考える

●インクルーシブな学びのあり方を考える

生徒の多様性を大切にしていきたいと思えば、「インクルーシブな学び」の考え方を基本にしていく必要があります。この概念は、多様な学び方、多様な理解度、異なる進捗、異なる到達度といった個々の生徒の特性を考慮に入れ、どのような特性を持っている生徒でも、皆が学びに参加できるようにする、という授業のあり方を求めています。

つまり、(ありもしない)平均的な子どもたちを想定し、同じ学び方・理解度・進捗・到達度を前提に授業を展開していた従来の考え方では、とうてい対応しきれない領域へと足を踏み出した、ということになります。

そこで、「個別最適化」や(自己調整を促進する)「自由進捗学習」というような、さまざまな試みが展開されているわけです。

しかし、いわゆる「万能薬(panacea)」に相当するような試みは、多様な環境で多様な生徒を対象に授業をしている以上、存在しないものです。そのため、特定の試みに振り切ってしまうよりは、それぞれの環境にあわせて、色々な方法を適切に組み合わせ、反応を検証しながら進んでいくやり方の方が、より現実的だといえるでしょう。

そうすると、どの単元の、どの授業の、どの部分で、このような試みを入れていくとよいのか、を考えていく必要が生じてきます。新学期のはじめに、少し時間をとって、このあたりを考えてみてはどうでしょうか。

●協力と連携を考える

不登校の傾向がある生徒、日本語指導が必要な生徒、発達障がい傾向を持つ生徒、医療的ケアが必要な生徒など、さま

ざまな傾向や状況に対応し学びを保証していくことも、インクルーシブな学びの求めることでしょう。このような多面性を持った支援への対応のキーワードは、教師間の協力と専門家・医療機関との連携ではないかと思えます。担当者が1人で解決策を考えるのではなく、気軽に相談できる仲間を身近に作る。教師集団全体で多様性に対応していく仕組みを事前に考えておく。途中で疑問が生じれば、専門家や医療機関と連携して解決に取り組んでいく。この時(教育委員会等の)行政のどの窓口が、専門家や医療機関にうまくつないでくれるのか、事前に把握しておく。こんなことに関しても、新学期がはじまる前に心づもりをしておく、いざという時に慌てずにすむのかもしれない。



おわりに

自律に関わる大きな方針からはじまり、学習環境の整備、授業のあり方、そして支援の進め方まで、さまざまな事前の準備について語ってきました。これを読んで、「はじまる前から憂うつになってきた」という方もおられるかもしれません。そんな方には、「わかるわー(I understand the feeling.)」と声をおかけしたい気持ちでいっぱいです。私も、このすべてを1人の人間が考えて実践していくなんて、とうてい無理だと思っているからです。でも、上述した事項のうち、どれか1つにでも興味を持って、そこからス

タートしていただくだけで、新学期の授業は変わらと思っています。

また、生徒の学びの多様性に対応するには、教師側の多様性の確保も大切です。多様な仲間と上記の事項を考え、試行錯誤しながら課題を乗り切っていくというやり方もあわせて試していただくと、道が拓けていくのではないのでしょうか。

新学期開始前のこの時期に、そんな気楽な(?)気持ちで本稿の内容を考えて、新しい実践へとつなげてみて下されば幸いです。



竹内 理

・関西大学外国語学部・大学院外国語教育学研究科 教授・博士(学校教育学)
・専門分野は英語教育学(学習方略、学習動機、学習者要因、自己調整学習)と外国語教育におけるメディアの利用

生徒の学びを育てる授業づくり



田尻 利恵子
(枚方市立山田中学校)



「わからない」から学びは始まる

●教える人から共に学ぶ人へ

先日新聞を読んでいると、三省堂さんの「AIの時代にことばを問う」、「問い『幸福』って何だろう?」という広告が目にとまりました。外国語教育における教師の役割は、言語を教えることではなく、どのように言語を学ぶのかを子どもたちと共に試行錯誤していくこと、ことばで生徒たち同士をつなぐこと、そして教材と生徒をつなぐことなのではないかと思うようになりました。みんながhappyだと思える瞬間がある授業を目指して、試行錯誤をくり返す毎日です。

●ことばをつなぐ、こころをつなぐ

年度初めのオリエンテーションでは、『わからない』が言える人は、授業に対して前向きで積極的な人だよ。」と伝えています。同時に、『わからない』と言ってくれたことに対して、みんなで一緒に考えてほしい。」ということも伝えています。以降の授業では、意図的にみんなで考える時間を取るようにしています。

先日こんな場面がありました。海外の学校との交流活動をゴールとした単元の後半部分で、友だちをその交流相手に見立てて、日本の食べ物、アニメ、学校の中から伝えたいトピックを選択して、発表メモを見ながら紹介する活動を行いました。まずはモデルとして、私が発表メモを参考に「たこ

焼き」の紹介をしました。その後、生徒たちは発表メモを作成し、そのメモを頼りに、自分で選んだトピックについて発表します。発表メモが完成したところで、そのあとの発表活動を生徒たちに委ねてみました。「とりあえず、どこまでできるかやってみよう。わからなかったら、一緒に考えよう。」という気持ちを“You can do it. Don't worry about making mistakes. Let's try.”と伝えました。

最初にモニターするポイントは、「言いたくても言えない表現」にしました。その日、クラスで目立つ存在のある男子生徒の様子がいつもと違うなという印象で授業が始まりました。挨拶のあと姿勢が崩れていて、表情も冴えません。何度も気かけながらその男子生徒に視線を向けていると、その様子を周りの生徒も気にかけてくれて、彼のことをチラチラ見えています。ペアトークが始まり、少し経ってから彼を見たら、先ほどの冴えない表情が行き詰まったような表情に変わっていました。私は急ぎ足で彼の側に行きました。伝えようとしていた内容は遠目からも確認できていたので、全体への中間指導では彼の「わからない」を話題にしました。「言いたかったけど、言えなかった、困ったことなかった? “Do you have any questions?”」と問いかけました。私

は彼の顔をチラチラ見ましたが、言おうか言わまいか迷っている様子でした。そこで、私は「〇〇君がとてもよくがんばって伝えようとしていたけど、ちょっと困っていました。何と言いたかったのかな?」と彼に質問をしたところ、「(寿司を)手で食べるって言いたかった」と答えてくれました。

さて、ここから、生徒たち同士をつなぐ教師の役割がスタートします。「手で食べるってどうやって伝えたらいい?」と問いかけると、まずは“hand”と単語を呟いてくれた生徒がいました。T-Tで授業をしていたので、T2の先生がワークシートに“with hand”とメモ書きをしていた生徒に気づいて下さり、その生徒に助けを求め、みんなの呟きをつなげて“You can eat sushi with your hand.”という表現にたどり着きました。

私はその時、まずはその男子生徒が「わからない」ことを伝えてくれたこと、そして、その「わからない」に対して考えてくれた生徒、反応して呟いてくれた生徒に感謝の気持ちを伝えて、みんなでがんばったことを誉めました。私は帰宅してからもこの授業のことをしばらく考えていました。学校で学ぶことの意義をこのクラスの生徒たちから教えてもらったような気がします。



ことばの力を伝える大切さ

●心を打つことばとの出会い

教科書にはことばの持つ力を伝えるヒントがたくさんあります。そのような視点で教材研究をすると、今までにない発見がたくさんあります。

令和3年度版 NEW CROWN (以下03NC) には1年 p.102 Lesson 6 USE

Readに“The fireworks touched my heart.”という表現が出てきました。

私は、素敵なことばだと思い、その思いを生徒と共有したくて、「Kateはこの1文でどんな気持ちを伝えたかったのかな?」という発問をして、英語表現の素晴らしさを楽しみじみと語りました。(急にこの先生、

どうしたんだろう? と思った生徒も中にはいたかもしれません…)

今思えば、初任の頃の私は言語を教えるのが外国語の教師の役割だと思っていたところがあり、もしその頃の私がこの本文を扱って授業をしたら、「日本語の意味は?」とか「touchは規則動詞で、-edがついた



touchedは過去形です。」という説明でそのページをさらりと終わっていただろうなと思います。

今は、生徒たちにはこれから感動した経験を積み重ねるたびに、その時の気持ちはこの素敵な表現を使って熱く語る人になってほしいという願いがあります。そして、そんな表現をあたたく受け入れられる人になってほしいという願いもあります。そんな生徒たちの具体的な姿を描くことができるようになってくると、この表現を使いたくなる場面をどうやって設定しようか？という悩みが出てきます。令和3年度版の教科書は、これまでの指導を見つめ直し、「どんな生徒の姿を目指して授業をしたいのだろうか？」「ことばを学ぶとはどういうことだろうか？」と常に問い続けるきっかけになりました。

●イラストや写真から始まることばの学び
教科書のイラストや写真も、ことばの持

つ力を伝える活動に発展させることができます。

例えば、03NC 3年 pp.40-43 Lesson 3 USE Readには佐々木禎子さんのお話があります。

私はピクチャーカードのイラストを使って、禎子さんがどんな気持ちでこの折り鶴を折っていたか、心の声を吹き出しに書かせる活動をこのReading活動の最後に設定していました。



「平和」についても考えてほしかったこともあり色々調べていたら、禎子さんの友だちのインタビュー動画を発見したので、それを見せました。そのインタビュー動画を通じて禎子さんがどんな人物だったのか

を知ることが、この活動を通して伝えたい「ことばの持つ力」を実感する手がかりになるのではないと思ったからです。

班ごとに考えてもらい、最後に発表してもらいました。印象的だったのは、禎子さんの気持ちを“want to”を何度も使いながら、見事に表現していた班があったことです。

I want to go back to school. I want to study with my friends. I want to run in sports day. I want to be a P.E. teacher. (原文通り)

その時も、「“want to”の持つことばの力って、こんなことだよ。くり返し使うことで、禎子さんの気持ちがより伝わるね。」と、しみじみ語ったことを今でも覚えています。(急にこの先生、どうしたんだろう？と思った生徒がこの時もいたかもしれません…)



一枚の写真に思いを巡らす

生徒の「学びたい」という気持ちを高めるために、単元の導入で生徒の興味関心と題材をどうつなげるかにかなり悩みます。

例えば、黒人差別問題を取り上げた“1 Have a Dream”では、紙面の中の一枚の写真を見せ、問いかけから始めました。



“Can you see the sign? What does it say?”と問いかけると、生徒たちは自分が感じたことを次々と伝えてくれました。他の生徒の意見に共感したり、驚いたり、時には“What do you mean? Why do you think so?”とやり取りをしながら、生徒の考えを引き出し、理解を広げます。その後、資料を通じて歴史的背景に触れ、説明文を読み、キング牧師の実際のスピーチを見せました。

最後にはキング牧師のスピーチの暗唱を行いました。キング牧師の一言一言に気持ちを乗せるために、生徒たちはスピードや声の強弱、音の高低に変化をつけながら、自然と私が理想とするスピーチに近づいていきました。一枚の写真への問いかけが、その後の活動を支え、生徒たちの学びの深

まりにつながったと感じました。

活動後、暗唱したスピーチを動画で提出してもらいました。授業中にはあまり自分の感情を見せることがなかった生徒も、感情をことばにこめて、キング牧師の想いを伝えてくれていました。ICTを活用すると、生徒のこんな新しい一面にも出会うことができます。

AI時代において、人間にしかできない「ことば」の力を身に付けることが大切だと思います。相手の立場に立ってみんなの幸せを考え、自分の考えをしっかりと自分のことばで伝えることができる。その積み重ねが、人生をたくましく切り拓く力になると思います。そんな生徒の姿を思い描きながら、これからも試行錯誤とコミュニケーションを生徒と共に楽しんでいきたいと思っています。

読み書きに困難がある生徒への対応



村田 美和
(高崎健康福祉大学)



英語の読み書きに困難があることは「珍しくない」

●英語圏で読み書きに困難がある生徒の割合

読み書きに困難がある人の割合は、英語圏では人口の10~20%とされています。つまり、35人学級の場合、読み書きに困難がある生徒が4~7人在籍しているという計算になります。これは日本で想定されている学習障がい(LD)の割合を遥かに上回ります。アメリカでは、Specific Learning Disability(法制度上の障がい区分で、日本の「学習障がい」と定義は同一ではありません)と呼ばれ、アメリカの特別支援教育の対象となる障がい種別の中で最も多くの割合を占めています。

●英語と日本語の違い

なぜ英語圏では、読み書きに困難がある生徒がより多いのでしょうか。その理由は言語の違いにあります。日本語は、「あ」というひらがなに対して、音は一種類しかありません。一方で、英語は、“a”という文字に対して、7~8種類の音があるとされています。つまり、文字と音の対応が日本語よりも複雑で多様であるため、それに対応できない状態が、英語の読み書きの困難さとして表れているとされています。

この困難さは、母語の違いに関係なく、日本人が英語を学習する時にも発現率は

大きく変わらないとされています。すなわち、日本語では学習障がいの特徴が見られない生徒でも、英語では学習障がいの特徴が現れることがあるということになります。このような生徒については、通常は診断書等をふまえ、学校側が合理的配慮を提供するという流れになります。しかし、そもそも10~20%の割合の生徒に読み書きに困難があることを考慮すると、クラス全体に対して教育的配慮をおこなっていくことも大切かもしれません。



授業内でできる教育的配慮

●端末による音声化

まず、教室でできることとしては、英語の音声をいつでも確認できる環境を整えることです。方法はいくつかありますが、学習者用デジタル教科書の音声再生機能を自由に使える環境を整えることをおすすめしています。そうすると、教科書の英文や単語の音声をすぐに確認できるようになります。

英語の読み書きに困難がある生徒は、英文や英単語を見て音声化することが難しいため、単純に読み方や発音を暗記させようとする指導では全く身に付きません。勉強不足なのではなく、それが特性であり、困難さなのです。目が見えない人に「頑張って見なさい!」とは言わないように、彼らに「頑張って読み方を覚えなさい」と厳しく指導したところで、読めるようにはなりません。英文が読めないと、課題や自主学習が進まないことは自明です。いつでも学習者用デジタル教科書を使える環境になれば、課題に取り組みやすくなり、自分から

英語の勉強をすることも可能になります。イヤホンをつければ、周囲を気にせず、自分のペースで音声再生機能を利用できます。

また、AccessReadingなどの教科書の電子データを活用することでも、教科書の英文を端末で読み上げさせることができるようになります。さらに、昨今はGoogle翻訳等の無料アプリでも、英文を写真に撮って即座に音声化できるようになりました。どのような形でも良いので、英文の音声を聞くことができる環境を整えることで、格段に英語の学習に取り組みやすくなる生徒が増えるでしょう。

●綴りの補助

綴りが覚えられないことも、読み書きに困難がある生徒の苦しさの一つです。一昔前までは、英単語はひたすらノートに書いて覚えるという方法が主流だったかもしれませんが、その努力を重ねても覚えられないようにならないのが辛いところです。英語圏では、Specific Learning Disabilityの人たちが使うための、スペル

やグラマーのチェック、予測変換などのソフトが発達しています。それにより何となくタイピングすることさえできれば、用途に合わせて端末の入力支援機能が綴りを直してくれ、正しい綴りで文章を作っていくことが可能になります。音声入力の精度も、目覚ましく向上してきています。タイピングが難しい段階の生徒は、音声入力でも良いでしょう。それらを活用することで、これまで書いて表現できなかった生徒でも、端末上で書いて表現することが可能な時代になってきています。

英語学習において読み書きに困難がある生徒は、通常学級の中にも多く潜在しています。それを前提に、英語の授業ではいつでも音声再生機能を使える環境や、タイピングで綴りの補助を可能にする環境を生徒が選べるようにすることが彼らの助けとなり、英語学習への意欲へとつながっていくことでしょう。

カラーユニバーサルデザイン(CUD)に 配慮した教材づくりの工夫



溝上 陽子
(千葉大学)



色覚の多様性

色の見え方には多様性があります。特定の色を識別しにくい特性を医学用語で色覚異常と呼び、日本人男性の5%程度にみられます。40人学級のうちの20人が男子生徒だとすると、各クラスに1人は色覚に特性のある生徒が存在する可能性があり、教育現場でも色覚の多様性に配慮した色使いをする必要があります。色覚特性にも様々ありますが、特に赤みや緑みが識別できない、または識別しにくい1型と2型の割合が多いです。1型には、赤が暗く見えるという特徴もあります。

右図は、Photoshopの色校正機能を用いてシミュレーションした、強度の1型と2型の色覚特性を持つ人の色識別の例です。ただし、弱度の場合は色覚正常に近い見え方となり、強度の場合でも、赤や緑を含む様々な色のカテゴリを認識しているため、図のように極端な青と黄色の世界ではな

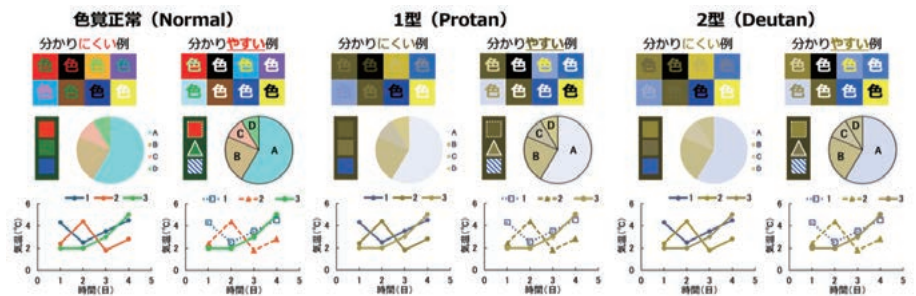
く、より多様な色を見ていると考えられます。また、観察条件や視対象の条件にも大きく影響を受けます。

色が見分けにくい例として、黒板と赤・青のチョーク、赤・黒のボールペン、赤色のレーザーポインター、赤い花と緑の葉、紅葉、お肉の焼けた部分と生の部分、顔色の変化、小さい緑と赤の電源ランプ、黒背景に赤表示の電光掲示板、多色の路線図、リトマス試験紙、電気回路の抵抗などが挙げられます。

が挙げられます。

赤は強調のためによく使われますが、1型の色覚特性を持つ人にとっては黒と混同しやすく、文中のどこが強調されているかわからなかったり、または黒背景と見分けがつかなかったりすることがあります。

また、オレンジと黄緑や紫と青緑の組み合わせは、全く異なる色のように感じますが、同等の黄みや青みの量を含むので、混同しやすい色です。



カラーユニバーサルデザイン(CUD)への対応

一般的に、大きく、太く、濃く、鮮やかに表現し、白黒コピーをしたときでも情報が伝わるように資料を作成すると、色覚特性に関係なく見やすいと言われていています。また、色名のみで情報を伝えるのではなく、対象物に色名を表記したり、形や記号など色以外の情報を組み合わせて伝えたりすると色覚に特性のある人にもわかりやすくなります。教材づくりにおける主な注意点は次の通りです。

● 配色の工夫

明るさのコントラストをつけると、見分けやすくなります。

見分けやすい配色例

明るい色と暗い色／濃い色と薄い色／暖色系と寒色系／彩度の高い色どうし／赤橙や

オレンジ系の強調色

見分けにくい配色例

淡い色どうし／濃い緑と、赤や茶／黄緑と黄／ピンクと水色／黄緑と橙／白と黄／濃い赤やマゼンタの強調色

● 色以外の情報の利用

色覚特性は多様であり、すべての人が混同しない色の組み合わせを選ぶことは難しいです。ディスプレイとプリントでは色再現が多少異なることあり、色だけに頼らない表現にすることも重要です。

・文字の場合は、フォントやスタイルを変えたり、下線を入れたりして区別する。

・図版は、オブジェクトの形状や塗り分けパターン（ハッチング）を変えて区別する。

・色の境界には白、黒または濃い色の境界

線を追加する。

・円グラフや地図などでは、名称をなるべくグラフや図中に挿入する。(小さい面積の凡例の色は見分けにくく、グラフや地図の該当部分との対応づけが難しい。)

・グラフの系列は、シンボルや線種を変えて区別する。



配色を工夫した例



色以外の情報を利用した例

東大阪市立義務教育学校
くすは縄手南校 後期課程

清家 大地先生
(8年生担当)



今回の授業は、2年生の Lesson 5 を取り上げます。よく質問をいただく Small Talk Plus の使い方についての実践です。このページには単元の内容に関連した話題が用意されており、会話を続けるためのヒントも示されています。そのため、ペアでの会話活動のチェックにも活用しやすいページとなっています。

あわせて、Goal Activity へのつなぎ方についても触れています。単元の中で内容のつながりが見えると、生徒の学習意欲の向上にもつながります。準備段階からワクワクできるようなレッスン計画を組んでいきたいですね。

授業紹介

Small Talk

Small Talk Where do you want to go? / What do you want to do? (15分)

今回の授業はSmall Talk からスタートします。生徒たちは私が用意した2つのプランから行きたい方を選んで、その理由などについて話します。

1つめのプランは神戸どうぶつ王国、2つめは鳥羽水族館です。実はこの2カ所はいずれも、私が今年家族で訪れた場所です。特に神戸どうぶつ王国は非常に思い出があります。前年度の9年生が「Seike familyに旅行先を提案しよう」というパフォーマンステストをおこなった際に提案してくれた場所の1つだったからです。その時は、たくさんの候補の中から家族会議で神戸どうぶつ王国に行くことに決めました。そしてめちゃくちゃ楽しめました。生徒が熱心にすすめてくれた理由がよく分かりました。

話はそれでしたが、その場所の魅力を語る時、自分の経験があるかどうかで、「熱量」に大きな差が生まれます。ですからSmall Talkの場面でもできるだけ自分の感じたことをそのまま伝えることを大切にしています。生徒たちは私がおこなったプレゼンテーションを聞いて、自分なりに行きたい場所やその理由について自由に話していきます。

神戸どうぶつ王国を紹介するプレゼンテーションの内容

The first plan is to visit Kobe Animal Kingdom. There are many kinds of animals, such as otters, capybaras, pelicans, and shoebills. You can feed some of them and enjoy a relaxing time with the animals. My daughter likes taking pictures, so she took many good photos there before.

ゴール確認

本時のゴールを確認 「私たちの町でおすすめの場所を紹介しよう」(10分)

このページの目標の1つは「+2センテンスに挑戦」です。質問に答えるだけでなく、そこにもう1つ、2つと情報を付け足していくことが求められます。先ほどのSmall Talk で話した内容を例に挙げながら、どうすれば情報を付け足すことができるかをクラス全体で考えます。

右のスライドのように、一番伝えたいことを最初に話し、聞き手がわかりやすい順序で話すことを伝えました。英語で話すときは、日本語とは違う考え方が必要だという点も強調しています。生徒たちは小学校の頃から、感想を言うことには慣れていますが、It's fun. やI like animals. といった表現は言えるはずなのです。しかしせっかくなので、中学校で習うsoやbecause などの接続詞を使ってもらいたいところ。そのため、私は使わせたい表現を例文の中にさりげなく入れておいて、実際にそれを使っている生徒がいたら全体の前で紹介して、発言を板書するようにしています。

+2 Sentences にするために

Where do you want to go?

質問の答え + a

I want to go to Kobe Animal Kingdom.
I like to see animals.
I'm busy every day, so I need time to relax.

- 聞き手がわかりやすいように話す順序を考えよう。
- もっとも伝えたい情報を最初に伝えよう。

Lesson 5 指導計画

Part 1 (2時間) 単元目標の設定

「ケイトのオーストラリア旅行について」

Part 2 (2時間)

「オーストラリアの名所 ウルル」

Part 3 Side Story (1時間)

「～の方法知っている?」

Small Talk Plus

「私たちの町でおすすめの場所を紹介しよう」

・+2センテンスに挑戦しよう

・聞き手がわかりやすいように話す順序を考えよう

Goal Activity (2時間)

パフォーマンス課題「関西の魅力を伝えるビデオを作ろう」

Language Focus (1時間)

文法のまとめ

本時の授業

Book 2 Lesson 5 (6時間目)



パフォーマンステスト

チャレンジタイム Where is a good place to visit in our town? (20分)

今回のメインピックです。例とルーブリックを示した後に準備ができたペアから教師の評価を受けます。この時間はChallenge time とし、約20分間生徒たちに時間の使い方を委ねます。しっかりと練習を積み重ねるペアもいれば、すぐにチャレンジしに来るペアもいます。生徒たちが自分のタイミングでチャレンジできることがとても大事です。こういった活動では、私は2つのことを大切にしています。

- ① 練習したことが活かされた実感できるようにする。
- ② 教師が手助けすることは極力控え、ペア同士の協力を促す。

これらはパフォーマンステストでも同じように考えています。生徒たちがこの授業や単元を通して、何ができるようになったのかを実感できることを重要視しています。終わった生徒は、話した内容をワークシートに書いて終了です。この「話す」→「書く」の順番も大事にしていきたいところです。

Challenge time

評価基準 (思考・判断・表現)

- A 目を注いだらうで、英語単語を用いてより発展的な会話ができている。
- B 決められたトピックに対して自分の答えだけでなく、**比較**などを付け足したり、**疑問**などを交えて会話をしている。(+2センテンスを口癖そう)
- C Bに達していない。



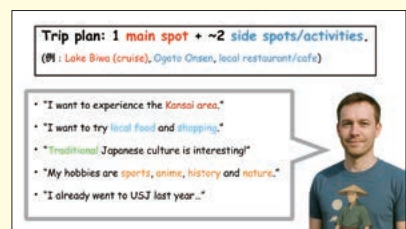
Goal Activity

Goal Activity (「関西の魅力を伝えるビデオを作ろう」)につなげる

さて、この授業はここで一区切りですが、次のページにはGoal Activity「町や地域の魅力を教えて!」があります。私はこの単元末のパフォーマンス課題として、日本に遊びに来るALTの友達に関西の魅力を伝えるビデオを作る活動を設定しました。教科書 p.64 の例を参考にしながら、生徒たちはそれぞれおすすめスポットを考えていきます。

ここで生きてくるのが Small Talk Plus でおこなってきた内容です。町でおすすめの場所を紹介したときに使ったフレーズや、情報の付け足し方をそのまま活用することができます。アイデアを一から考えなくても、前の時間の活動を少し言い換えるだけで、ベースが完成します。

今回の教科書では、Lesson の中に Goal Activity につなげるヒントが多く用意されています。ただし、そのつながりを教師が意識して授業しないと、学習は断片的になってしまいます。せっかくなので、「Goal Activity では、Small Talk で話したことがそのまま使える!」と生徒たちが感じられる授業にしたいですね。



授業終了

授業を終えて

パフォーマンス課題のビデオ撮影はペアでタブレットを使っておこないました。撮影した動画を見直し、再撮影するペアもありました。「この内容で相手に伝わるか」と考えることは、相手意識を育てる良い機会です。「言語は相手に伝わってなんぼ」ですからね。ただ、提出されたビデオを確認すると、同時に撮影していた他の生徒の声がかなり入っていました。撮影環境については、反省が残りました。生徒同士の撮影って、なかなか難しいですね。

生徒のニーズを活かす英語授業②

英語で表現したかったことを収集した *EasyConc*の活用

日臺 滋之 Hidai Shigeyuki (拓殖大学)

英語で表現したいという ニーズへの対応

生徒の英語でのやり取りをモニターしていると、英語で表現できない語句を先生に聞く場面 (appeal to authority) や、行き詰まって会話を止めてしまう場面 (message abandonment)、また英語に日本語を混ぜて会話を継続する場面 (language switch) を目にします。これらは生徒が身につけていない文法や表現の使用を避ける現象で、回避 (avoidance) と言われています (Tarone et al., 1983)。

Small Talkでの生徒たちの身近な話題で言えば、「部活の練習試合」「部活の大会で優勝した」などの部活動がらみの話題で、どう言えばよいのかといった質問が出ることがあります。学年が上がり教科書で学習したことが増えたからといって、急に英語で表現できるようになるわけではありません。「回避」を避けるためにも、生徒が表現したいと思った時に、生徒の手の届く範囲の語彙や文法で表現できるような支援が必要だと思います。

表現したかったことを収集したアプリ

今回はコーパスを使用した支援例をご紹介します。言語活動のあとに、学習者に英語で表現したかったことを日本語で書いてもらい、その日本語と英語表現を対応させて構築した*EasyConc*というアプリが公開

されています (北村他、2021)。このアプリで「部活」と日本語検索すれば、「部活の練習試合」「部活の大会で優勝した」などと言いたい時の有用な表現がヒットします。*EasyConc*は、教師にとっては生徒のニーズを活かした教材作成に活用でき、生徒の端末にインストールすれば、生徒が自分の知りたい表現を調べたり、授業に個別学習の時間を取り入れたりすることができます。

生徒のニーズに応える指導の例

NEW CROWN 1年 Lesson 6のSmall Talk Plusでは“What do you like about your school life?”というテーマでSmall Talkをおこないます。Round 3ではPart 1「好きな教科について」、Part 2「好きな給食やお弁当について」といったように、前のPartで話したテーマでもう一度話してみるよう工夫されています。表現の定着には、このようなくり返しが必要です。Small Talk Plusの学習後に帯活動を組み、次の授業では生徒のニーズを活かし、学校行事や部活動など、話題を変えてやり取りの活動をおこなうとよいでしょう。

指導手順—「好きな学校行事」

STEP 1: 教師とALTで次のようなモデル会話をしたり、録画した映像を見せたりします。

A: What is your favorite school event?

B: I like Sports Day. The relay race is exciting.

A: Me, too. The runners are very fast. We cheer for our team.

STEP 2: 生徒と会話についてQ&Aを行うなど、インタラクティブをしながら、内容の確認をします。内容がある程度理解できたら、モデルの会話文を文字で見せます。

STEP 3: 下線部の箇所を生徒の伝えたいことに合わせて変えるよう指示します。ここで考える時間をとり、生徒が使いたい英語表現を思い起こせない場合は*EasyConc*を活用します。考える時間を短くすれば即興に近づきます。

例えば、Bの発話でリレーの代わりに応援合戦や綱引きについて言いたい場合、「応援」「綱引き」で検索すればその表現がヒットします。そのあと、複数回ペアを変えて対話をします。

STEP 4: 活動後に、生徒のニーズを知るために、英語で言いたかった表現をふり返りシートに日本語で書いて提出してもらいます。

あとで生徒が「回避」した表現をフィードバックすることで、生徒の表現力は伸びていきます。教科書と関連づけて、生徒が知りたいと思う表現を授業で提示することで、生徒のニーズに応えることができます。



David Allen (Ochanomizu University)

In a previous essay, I introduced the concept of *washback*, that is, the effect on teaching and learning that assessments may have. This time, I would like to illustrate the concept with some examples from my own research into washback in Japanese schools and universities.

In my first washback research investigation, I asked university students to describe their language learning behaviors and motivations regarding different assessments: the entrance exams they took for their university, and the International English Language Testing System (IELTS). For their university exam, students mainly practiced reading, and focused much less on listening, writing, and speaking. This distribution of effort reflected the content of the assessment. For IELTS, in contrast, they focused more on speaking and writing skills because these were seen as the most challenging.

In a second study, we introduced the Test of English for Academic Purposes (TEAP) to senior high school students. Students reported how they learned English in regular classes, and how they studied for TEAP. We found that learners regularly practiced all four skills, and so rather than greatly changing their behavior for the assessment, they just made small adjust-

ments to their studies, such as writing about charts.

In another senior high school project, we looked at how the Cambridge B1 Preliminary and B2 First tests influenced teaching and learning. Again, we found that because the school curriculum emphasized all four skills, and because these four skills were assessed in the exams, students could generally cope well enough without changing their learning behaviors extensively.

What we learn from these studies is the importance of *alignment* between the different elements of the learning system: curriculum, teaching materials and methods, and assessments. When these elements are all directed at the same educational goals, the system functions harmoniously. However, when they diverge from one another, disruption occurs and achievement of educational goals is hindered. Consequently, our task is to critically reflect on our use of assessments so that we ensure they are supporting learning in the best possible way.

O'Sullivan et al. (2022). *The importance of the four skills in the Japanese context*. British Council.

NATTOKU!
18

リクツで納得! 学校英文法の「文法」 巨理 陽一 (北海道大学)

名詞句の中の出来事



前回と前々回で「属格」の表現 (TEN 56) や複合名詞句 (TEN 55) を取り上げたのは、「出来事の名詞句化」の話をするためでもある (Huddleston & Pullum (Eds.), 2002, pp. 475-476)。例えば、「Jing's departure」には「Jing departed.」という出来事が、「Yoichi's destruction of the file」には「Yoichi destroyed the file.」という出来事が含まれている。名詞句の主要部 (上の例で言えば departure と destruction) は、動詞 (depart, destroy) の形態論的派生と考えることができる。

さらにこの場合、Jing や Yoichi は主語の役割、the file は補語 (目的語) の役割を果たしていることもわかる。つまり、直訳すれば「ジンの出発」や「陽一のファイルの破壊」と「の」の連続で表現されるかもしれないが、その意味は「ジンが出発したこと」であり、「陽一がファイルを破壊したこと」である。これを踏まえると、声優がとらえる「the original characters' tone of voice, feelings, and emotions」(NC3, p. 50) も、tone を「の音調を変える」という意味の動詞と捉えれば、この形で「もとの登場人物たちが声の調子や感情の表現を変えたこと」を表しており、「the voice, feelings, and emotions' tone of original characters」とはならないことに一応説明がつく。

他動詞節を名詞化する際、「Yoichi's destruction of the file」のような形に加えて、「The file's

destruction by Yoichi」や「The destruction of the file by Yoichi」のように by 句を用いる言い方もあり得る。名詞句のこうした多様性は、動詞を用いた場合、能動態 (Yoichi destroyed the file) か受動態 (The file was destroyed by Yoichi) のいずれかで表現されるのと異なり、学習者を惑わせる要因になる。ただここで注目したいのは、受動態と同様、by 句で表されるのはいずれも主語の役割を果たす要素だということである。「Yoichi's destruction by the file」では意味が根本的に変わってしまう。行為者という役割を目立たせたい場合に by 句が用いられるのは受動態と共通している (ただし、受動態で「These facts were known by his father」のような表現が可能なのに対し、*the knowledge of these facts by his father という名詞句は認められない)。

この考え方は、by 句が明示されていない場合にも役に立つことがある。「the achievements of Martin Luther King, Jr.」(NC3, p. 78) は「キング牧師が成したこと」だが、「The arrest of Rosa Parks」(NC3, p. 80) はもちろん「ローザ・パークスが逮捕したこと」ではなく、「ローザ・パークスが逮捕されたこと」である。これは、直前の「The police came and arrested her.」(NC3, p. 79) を踏まえれば、「The arrest of Rosa Parks (by the police)」、すなわち「(警察が) ローザ・パークスを逮捕したこと」

だと分かる。「The file's destruction」や「The destruction of the file」のように要素が1つしか示されていない場合、どういう by 句が補えるかを考えると、それが主語と補語 (目的語) のいずれの役割を果たしているかを判断する手がかりになる。by 句は受動態のためだけのものではないのだ。

映画007シリーズの最高傑作である『007/カジノ・ロワイヤル』(マーティン・キャンベル監督) の主題歌、Chris Cornell の「You Know My Name」に、「When the storm arrives, would you be seen with me by the merciless eyes I've deceived?」という一節がある (聴く際は、ぜひ映画のオープニング映像と併せて聴いてほしい)。対応する平叙文は「The merciless eyes I've deceived would see you with me.」で、主語名詞句にはさらに関係代名詞節で「I've deceived the merciless eyes.」という出来事が入っている。つまり元の歌詞は、嵐が来たら、「私が欺いてきた無慈悲な眼は、私と一緒にいるあなたを映すだろう」か、と問いかけており、本作の重要な内容を示唆する一節となっている。しかし、by 句によって行為者であることが明示されたとしても、「the merciless eyes I've deceived」が誰の眼のことを指しているのかは、少なくともこの曲の歌詞だけでは明らかにならない。ぜひ映画を観て、次々展開される出来事を名詞句化しながら考察してもらいたい。

Q&A

Question

思考力、判断力、表現力を育成する言語活動に必要とされる、「目的や場面、状況」の設定に現実味を持たせるのが難しいです。どのような工夫が考えられるでしょうか。



A

Answer

「目的や場面、状況」を、言語活動のゴール(終着点)、ツール(教材・教具)、ルール(活動手順)、ロール(参加者の役割)の視点で見直し、生徒と話し合いながら設定することで、その意義も明確になります。



今井 裕之(関西大学)

言語活動の幅の広さ

思考力、判断力、表現力等は、外国語科では、目的や場面、状況に応じた言語運用を、言語活動を通して育成することとされ、教科書の言語活動もその視点でデザインされています。

一方で、授業研究会等で先生がたのお話を伺っていると、目的や場面、状況の解釈が多様で、言語活動の幅が広いと感じます。コミュニケーションの目的が明確な活動から、言語材料の練習活動まで、幅広く言語活動と呼ばれているように思います。コミュニケーション活動も練習活動もどちらも言語習得には必要な学習活動ですが、学習指導要領上の言語活動は、目的や場面、状況に応じたコミュニケーション活動を指します。

「目的や場面、状況」の複雑さ

NEW CROWN の3年 Lesson 7 Design for Change の Goal Activity を例に考えてみましょう。この言語活動の設定は「わかば商店街には、たくさんの利用者や海外からの観光客が訪れます。いくつかの問題に対応するために、新たに設置する注意事項の掲示のアイデアを募集しています。」というもので、グループで掲示板のアイデアを一つ提案するの

がゴールです。この言語活動のコミュニケーションの目的は「わかば商店街の問題に対応するため」で、場面、状況は「利用者や観光客増で生じている問題に対応するために、注意事項を掲示するにあたり、アイデアを募集している」となります。この目的や場面、状況での言語活動は「アイデアをグループで話し合うこと」になります。オーバーツーリズムが国内外で社会問題になる中、架空のわかば商店街の問題を解決する「話すこと(やり取り)」の思考力、判断力、表現力を育成する、というのが学習指導要領的な説明になります。

目的や場面、状況(「何のために」「どんな場面で」「どんな状況や条件を踏まえて」と活動内容(「何について」「どんな英語を用いて」「何ができる」とをうまく組み合わせると言語活動をつくるのは至難の業ですし、さらに授業展開や教材・資料も考えないといけません。もう少しシンプルな枠組みはないものでしょうか。

言語活動を4つの視点で捉え直す

言語活動を、活動に参加する視点で捉え直してみましょう。活動参加者が知りたいことは「ゴール(終着点)」「ツール(教材・教具)」「ルール(活動手順)」「ロール(参加者の役

割)」の4つに集約できます。

まずゴールを、オーバーツーリズムの問題解決とし、それに必要なツールとして、商店街の地図、トラブルスポットの説明、話し合いのポイントの説明動画などを用意します。この活動を行うときのルールを、問題点を選ぶ、対策を出し合う、アイデアを絞るという手順とし、ロールとして、グループディスカッションの進行役、記録・報告役を決めるといった具合です。こうすることで、活動の内容と手順、生徒がすべきことが関係づけられ、取り組み方をわかりやすく説明できます。

言語活動をツールとロールで改善する

最初に計画した活動案がうまくいかず、生徒たちが盛り上がらない場合はどうすれば良いでしょうか。言語活動を改善するには、特にツールとロールに注目します。例えば、ツールを、自分たちの街の地図や問題点に変えて、ロールを、実際に市長に提案するなど、報告役のリアリティを高めると、より真剣に活動に取り組むことができます。

もし生徒たちの学力が十分ではない場合は、ツールのトラブルスポットの数を減らして検討内容を簡潔にする、ロールの報告役を複数人にして協働を促すなどが考えられます。

NEW CROWN デジタル教科書 アップデートのお知らせ

令和7年度版『NEW CROWN』の各種デジタルコンテンツをご利用中のみなさまへ、
令和8年度のアップデートをご案内いたします。
引き続きご活用ください。

UI 調整

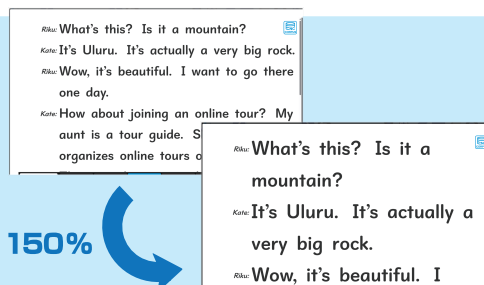
押しやすく、誤操作しにくいように、使用頻度の高いボタンを中心にボタンサイズを拡大しました。また、書き込み機能では、最後に使用した設定を保持できるようになりました。



テキスト拡大

教室の後ろからでも読みやすいように、テキストの拡大表示(125%・150%)が可能になりました。

対象箇所：本文拡大、スクリプトなど



その他

音声の再生位置を調整できるシーケンスバーの搭載、Sceneの各コンテンツに対応するアイコンの追加、フラッシュカードの「もう一度」機能、ピクチャーカードの並べ替えのカード拡大機能、補充発問の追加、ほか軽微な修正

訂正に関するお知らせ

▶ NEW CROWNについて

三省堂 教科書・教材サイト

三省堂 中学英語 訂正



令和7年度版『NEW CROWN』に訂正がございます。訂正につきましては、すべて文部科学省の承認のもと、令和8年度供給の教科書では修正いたします。訂正箇所につきましては、弊社ウェブサイトに掲載しております。先生方や生徒のみなさまにご迷惑をおかけいたしますことを深くお詫びいたします。ご指導の際にはご留意くださいますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

▶ 指導書付属データ アップデートのお知らせ

ことまな学校サポートサイト

ことまな学校サポートサイト



「ことまな学校サポートサイト」では、指導書に付属する各種データの他、指導や評価に活用できるさまざまなデータをご提供しております。このたび、一部の付属データについて修正をおこなっておりますので、ウェブサイトにてご確認ください。

ことまな学校サポートサイトは、令和7年度版『NEW CROWN』の指導書をご採用いただいている学校ごとの専用サイトです。ログインには、IDとパスワードが必要です。

NEW CROWN

学習者用デジタル教材のご案内



レベル別の学習コンテンツと学習記録で自学をサポート！

① レベルに応じた家庭学習モード



デジタルコンテンツを活用しやすくするための『家庭学習モード』を搭載！

家庭学習モードでは、**生徒ひとりひとりのレベルや技能に応じた効果的な学習メニューを提案します。**提示された学習メニューに取り組むことで、日々の学びを積み重ねていくことができます。さらに、**学習履歴の記録・閲覧機能を使って、学びのふり返りが可能です。**

② 教科書も教材もシームレスに使える ③ 豊富なワーク・ドリルコンテンツ



教科書紙面から直接、各コンテンツを呼び出すことができます。



文法、単語、英作文といったワーク・ドリルコンテンツを豊富に収録しています。

「辞書付」なら、教材にプラスして辞書も使える！

■ 学習者用デジタル教材[教科書・教材一体型]

品名	ライセンス期間	ライセンス形式	価格
学習者用デジタル教材 (各学年)	教科書刊行期間	生徒あたり 1ライセンスが必要	550円(税込)
学習者用デジタル教材 辞書付 (各学年)	教科書刊行期間※	生徒あたり 1ライセンスが必要	1,100円(税込)

※辞書コンテンツのみ、購入年度内に限り有効。継続してご利用いただくためには次学年の購入が必要です。別途、デジタル教科書の販売もございます。価格等の詳細はお問い合わせください。本紙掲載の会社名、製品名、商品名などの名称は、各社の登録商標または商標です。

*株式会社Lentrance の提供するLentrance Reader でのご利用となります。対応環境は、Lentrance Readerに準じます。

*学校採用専売の商品です。一般向けに販売する商品とは異なります。

*文部科学省により提供される学習者用デジタル教科書とは異なります。

ご案内

文部科学省「令和8年度学習者用デジタル教科書の導入」について

提供の詳細につきましては、弊社ホームページにてご案内しております。学習者用デジタル教科書の体験版もご覧いただけます。

<https://tb.sanseido-publ.co.jp/digitaltext/support/>



三省堂 小・中学校 教科書
LINE 公式アカウント
はじめました!

授業のお役立ち情報を
定期的に配信中!



友だち募集中!

三省堂 〒102-8371 東京都千代田区麹町5-7-2

三省堂 教科書・教材サイト <https://tb.sanseido.co.jp/>

※この冊子は、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って配布しております。